

2月



あの日のあの川 リレー日記 ～第54話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第54話主人公 山倉大輝

(筑波大学 社会・国際学群 国際総合学類 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)

(出身地を流れる川：長野県千曲川)

「北欧で見つけた新たな川の顔」

いつのこと？：大学3年生

どこの川？：ナルバ川(エストニア)

皆さんこんにちは。松永くんからバトンを受け取りました、筑波大学白川研究室の山倉です。皆さんが書いたリレー日記を読み返し、卒業を目前にして「ついに自分の番が来たか…」と少し感慨深く思いながら書き始めています。今回は、私がエストニア留学中に訪れたエストニア東部の都市ナルバを流れる「ナルバ川」を紹介しつつ、河川に対する考えについても触れさせていただきます。拙い文章ですがしばしお付き合いください。

突然ですが、皆さんエストニアという国はご存じでしょうか。フィンランドの南、ロシアの西に位置する、バルト三国の一国です。人口は約130万人、面積は日本の9分の1という小国です。元力士のバルトさんの出身地であり、IT先進国として界隈では有名な国です。ちなみに美人が多い国としても知られているんだとか。

「ナルバ川」は、そんなエストニアの東部に位置する都市ナルバを流れる河川です。実は、このナルバ川、大きな都市に挟まれているにも関わらず、橋がほとんどかかっていません。そしてその橋には、非常に高い柵が設置されています。お酒好きなエストニア人が羽目を外して飛び込むを防ぐため？いえいえ、その理由はロシアとの国境となっているから。ナルバ川を挟んで東にロシアのイヴァンゴロド城、西にエストニアのナルバ城が存在し、数少ない橋の両端は国境検問所となっています。河川沿いに散歩道が整備されどかな空氣が流れる一方、検問所付近は少し物々しい雰囲気も感じます。そんな風景を眺めながら、私は何か違和感のような不思議な感情を抱きました。それは、川の向こうが異なる国であるという事実が、これまで経験し得ないものであったためです。

少しエストニアと周辺国家の歴史をさかのぼります。西にナチスドイツ、東にロシアが位置するエストニアは非常に重要な貿易ルートであり、東西の緩衝地帯で常に周辺の大国の脅威にさらされてきました。かつてナルバも「バルト海の真珠」と呼ばれ、ヨーロッパを代表するバロック建築の美しい街並みを誇っていました。しかし第二次世界大戦で大きな被害を受け、ナルバ川も幾度となく戦いの舞台として激しい争いを見守ってきました。

それまで、私にとって河川とはあくまで川遊びや釣りなどにいそむ「遊び場」であり、自然豊かな景観を形成する一要素に過ぎませんでした（もちろん深い・怖い、増水によるリスクなど、負の側面も認識していましたが）。そもそも長野県の山間部で育った私にとって普段は海すら目にするにはなく、国境なんて考えるきっかけすらありませんでした。しかし、ナルバで見つけたその川は、川はまだ私の知らない顔をもっていることを実感させてくれた、いままで見たことのない「川」だったと思います。

ナルバ川を挟んで数十メートル先にあるのは他の国、それもわずか数十年前まで独立をかけて戦った国家です。現在でもサイバー攻撃を始めとした侵略の危機にさらされています。エストニア人はどのような心持ちでこの川を眺めているのでしょうか。島国で生まれ育った私には想像もつきません。しかし、人々が争ってしようと都合よく利用しようとして、ただ悠然と流れ続ける川の雄大さのようなものを感じとることができました。

半分くらいは川ではなくエストニアの話をしてしまいましたが、皆さんの川に対する認識の幅が少しでも広がると幸いです。以前から街歩きをすることが好きでしたが、当ゼミに所属してからそこに川という観点も加わってより一層街歩きを楽しめるようになりました。今は遠出ができない状況ですが、また日本や世界の川やその歴史に思いを馳せながら街歩きができるようになることを祈りつつ、結びとさせていただきます。ここまで読んでいただきありがとうございました。

(次は鎌田一輝さんにバトンを託します)